

《オペラ座の怪人》報告

3月10日、ルナ・ホールにて映画「オペラ座の怪人」を楽しみました。美しくも哀しい愛の物語に心を打たれました。物語の中心にいるファントムは、その素晴らしい歌声とともに悲壮感が漂い、観る者の心を掴んで離しません。また、クリスティーヌとのロマンスは、純粹な愛の形を象徴しており、その対比が物語を一層深くしていました。映像美と音楽の融合が見事で、特にファントムがオペラ座の地下湖を渡るシーンは圧巻でした。全体を通して、観る者の感情を揺さぶる壮大な作品であり、一度観ると忘れられない映画でした。

参加者は193名、担当は企画Gでした。

◆解説・あらすじ《映画.com》

「キャッツ」「エビータ」などの大ヒットミュージカルを生み出した作曲家アンドリュー・ロイド＝ウェバーが、ガストン・ルルーの小説をもとに手がけたミュージカル「オペラ座の怪人」を映画化。ロイド＝ウェバー自身が製作・作曲・脚本に参加し、「バットマン フォーエヴァー」「フォーン・ブース」のジョエル・シュマッカー監督がメガホンをとった。

19世紀のパリ・オペラ座では仮面をつけた謎の怪人・ファントムの仕業とされる奇怪な事件が続いていた。リハーサル中に起こった事故をきっかけにプリマドンナの代役を務めることになった若きオペラ歌手のクリスティーヌは、初主演となったその舞台で喝采を浴び、幼なじみの青年貴族ラウルとも再会を果たす。クリスティーヌに才能を見いだしたファントムは、彼女に音楽の手ほどきをし、クリスティーヌはファントムを亡き父親が授けてくれた「音楽の天使」と信じ、プリマドンナへと成長する。ラウルに愛されながらも、孤独な魂と情熱を持ったファントムに心をひかれていくクリスティーヌだったが、ある時、ファントムの仮面の下に隠された秘密を知ってしまう。

ファントムをジェラルド・バトラー、クリスティーヌをエミー・ロッサム、ラウルをパトリック・ウィルソンが演じ、ミュージカルシーンの歌唱もすべて本人が担当。スワロフスキー・クリスタル製のシャンデリアをはじめとした豪華絢爛な美術と衣装や装置なども見どころで、アカデミー賞では撮影賞、美術賞、歌曲賞にノミネートされた。日本では2005年1月に公開され、興行収入42億円の大ヒットを記録した。

2004年製作／141分／アメリカ 原題：The Phantom of the Opera

劇場公開日：2005年1月29日

(広報G 兵東勇 記)









